

薩摩藩の白炭

株式会社島津興業 尚古集成館 研究員 福元 啓介

急速な近代化を目指して反射炉の建造に着手した薩摩藩であったが、課題となったのは燃料の確保だった。当時、日本では西洋諸国のように石炭の利用が本格化していなかったため、代わりに用いられたのが高火力を発揮する白炭だった。薩摩藩では藩領であった日向国南部の山林で白炭生産を進めていたが、島津斉彬はさらにその品質改良に取り組む。炭焼き達を白炭生産の本場であった紀州へと派遣し、技術の伝習を行った。本場の技術を学んだ炭焼き達の手で、薩摩藩領内でも高い品質の白炭を生産することが可能となったのである。

磯集成館に反射炉が完成すると、斉彬は直ちに白炭の磯への輸送を命じている。しかし日向の山林で生産した白炭では輸送コストなどの問題もあり、斉彬は磯近隣に炭山を設置することを計画する。これを担当したのも、紀州で技術を学んだ炭焼き達だった。その結果、安政四年には磯周辺の「荒平」「孝行ヶ谷」の山中に炭窯が設置されている。寺山はその延長で設置された炭窯であり、周辺の山中にはいまだ知られていない炭窯が残っている可能性もある。

寺山の炭窯は紀州の炭窯の特徴を有するが、非常に大型という特徴がある。史料や発掘調査の成果から比較しても、二倍以上の大きさとなっている。なぜ効率が悪いとされるこのようなかたちをとったのかは、今後さらに検討する必要がある。

安政5年7月に島津斉彬が急逝すると、寺山炭窯も閉鎖されてしまう。その稼働期間はわずか1年足らずに過ぎなかった。しかしその後の処理に関する史料によると、寺山を含む磯周辺の炭山では白炭を6000俵もすでに生産済みであると報告されている。稼働期間は短い物であったが、その製炭能力は確かなものであったと言える。

また、薩摩藩で生産された白炭と近代化事業とのかかわりは藩内だけにとどまらなかった。日向における山林経営を担当した御手山支配人・山元家の史料によると、江戸幕府が長崎に建設していた飽ノ浦製鉄所（のちの長崎製鉄所）から、燃料として薩摩産の白炭が注文されていたことが判明する。そして、薩摩藩はこれに応え、ただちに大量の白炭を納入している。このように、石炭利用が本格化する以前、急速に実現を目指した九州の近代化事業において、薩摩藩の白炭生産が果たした役割は大きかったのではないだろうか。